



標註枕草紙讀本

一

特別
イ 4
3163
214(1)



賈
413
11

佐木弘綱標註

版權所有

標註枕草紙讀本 全五冊

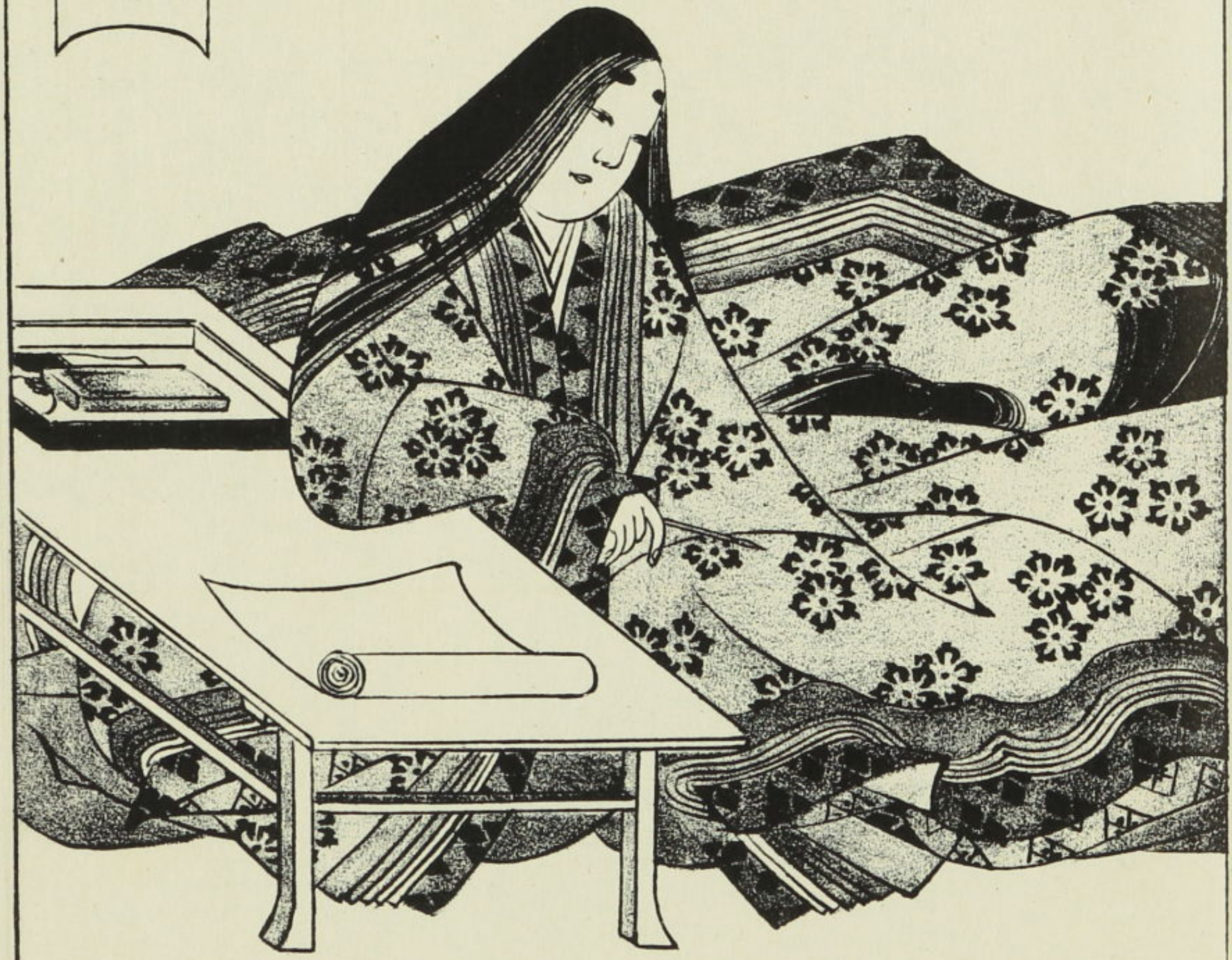
東京書林

弦卷藏版



峰高
卷一

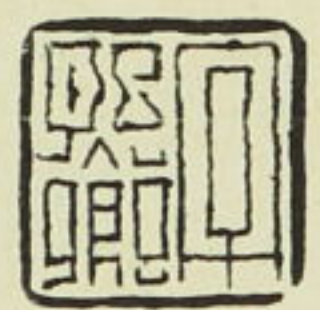
清少納言之肖像



義海寫



從二位通祿



標註枕草紙讀本目次

卷一

四季	一丁	頃ハ	二
ことらなる物	五	大進生昌	六
命婦翁丸	十	節句	十四
今内裏	十五	山ハ	十五
原ハ	十六	市ハ	十六
海ハ	十七	わたりハ	十七
家ハ	十七	清涼殿	十七
たゆまらる物	廿八	人あなづらる物	廿八
にくき物下	卅二	心時のきする物	卅五
心ゆく物	卅六	小一條院	四十
七月むかり	四十六	小白川	四十一
		正月一日	九
		姫宮	十四
		よろこび	十六
		峯ハ	十六
		淵ハ	十七
		みよきハ	十七
		すまき物	廿四
		にくき物上	廿八
		過少方戀き物	卅五

卷二

木の花ハ	一丁	池ハ	二	せちハ	三
木ハ	五	鳥ハ	七	あてなる物	九
虫ハ	十	ひろね	十	よびなき物上	十一
細殿よ	十二	主殿司こそ	十三	職の御曹子	十三
殿上の名謁	十七	よびなき物下	十八	瀧ハ	二十
川ハ	二十	橋ハ	廿一	里ハ	廿一
草ハ	廿一	集ハ	廿三	歌の題ハ	廿三
草の花ハ	廿三	覺束なき物	廿五	た〜なき物	廿五
ありがなき物	廿七	内のつぼね	廿八	一聲の秋	三十
あぢきなき物	卅一	いとほびなき物	卅二	心地よびなる物	卅二
御佛名	卅二	頭中將	卅三	物の哀れせ顔なる物	卅四
左衛門の陣	卅四	雪の山	卅五		



山ハ氣ニ随ふ
 相ある故ニ天
 氣曇れば遠く
 して見えぬ晴
 る時ハ近く見
 ゆ多くと万葉
 抄よいつる説
 書なるべし

標註枕草紙讀本卷一



清少納言作
 源和綱標註

四季 一段

春ハ曙やうく白く成ゆく。山ぎはほととぎす。あうり
 て。ぼだちくる雲のぬくたるびきくる。夏ハよる。
 月の比も更なり。やみもさほやうるとびちぐひ
 たる。雨もどのふるさつさか。秋ハ夕ぐれ。夕日
 こそあやうにさして。山ぎハいとちうくなりたる
 小鳥のねどろろへゆくとして。川よつふるる
 ごとびゆくさへあをれをり。まいて雁もどのつ

つふべきよも
あらずハ、イハ
ウヤウモナウ
オモシロキケ
シキヂヤとい
ふさるり。

らねるがりとちいさくみゆるいとをさる。日
つりもて。風のねと虫のねをいともあまれな
り。冬ハ雪のみりたるハりよぶきうも何れだ。ね
るどのいと白く又さうでもいとさむき火をど
いそぎおろして。もみもてわたるさいとつきぐ
ー。ひまにふりてぬるくゆるびもてゆけを。び
川火をけの火も。さるきさひぐらよをりぬるハ
クろ。

ころハ 二段

正月三月。四月。五月。七月。八月。九月。十月。十二月。さるて
をりよつけつ。ひととせをぐるをさる。

正月一日 三段

れいさるれえは
例は目近見
要に事即し貴
人の真白まの鼻
林ははやすと
白馬を。あをう
ま。日本紀よ
よわり。丸物至
て白きハ必青
き色あひをか

正月一日ハ。まいてるらのけーきうらくとあづ
ら。かきみこめたるふ。せよありとある人。
す。がたか。も。心。こ。も。つ。く。ろ。ひ。君。さ。も。我。身。を
も。い。さ。ひ。さ。ど。さ。つ。る。さ。は。こ。と。よ。さ。の。七。日。を
雪。の。の。わ。り。を。き。や。う。に。つ。出。つ。れ。い。さ。も。
さ。も。の。め。ぢ。り。か。ら。ね。と。さ。り。も。て。さ。さ。ぎ。白
馬。ん。と。て。里。人。と。ら。ま。ま。よ。げ。ふ。さ。く。と。見
ふ。ゆ。く。中。の。御。門。の。ど。き。さ。ひ。き。い。さ。秘。が。ら
ど。も。つ。と。さ。ろ。よ。す。ろ。び。あ。ひ。て。さ。さ。く。も。ね。ち。
よういせね。ば。を。れる。ど。て。わ。ら。ふ。も。又。さ。う。

原本と作り
易しと地獄
誤りにて
と作り
ゆりて馬
ゆりて馬

九重たり
ちぢりすけ
ソフは
程のとき
んとなり

ぬるものあり
とぞ。
左衛門陣建春別衛
府の官人守屋
の影をいふ

女官よようく
ろんとよむべ
女公人の熱
名くと名目村
よ見えうり。

た束つのぢんなどよ。殿上人あまことたちなご
て。とねりの馬どりをさうておどろかしてわら
ふをどつうふ見しきされどたてとみあどの
見ゆるにどのむうづうと女なあどのゆきちが
ひたるこそをかつけきいっどりのりやう人ご
のつをかくだちあうすらんなどおれいやら
うちうもえんといとせむきやどよてどねう
がうほのまぬもあうそれしろきものゆき
うぬとろいさうとにらろき庭よ雪のむき
えたる心ちいていと見ぐる。馬のあがりさわ
ぎたるもおそろくねほゆさをひきいられて

ほきやせ酔
ゆりて馬
ゆりて馬

かゆの本はにほの
木にてつかり其
は四つ割とあそ
の馬けけはさう
掃き廻すねえに
つかりをいふ
かゆの本ハ狭
衣の四よがゆ
杖とあるよお
あるおなり。こ
きをわらて。女
のうらをりて
バ子を妊むま
とまひくとぞ。
古今要覽よく
そとと考證せ
られう。

よくも見えやられた。
八日人よよろこびまうまうわぎ車のおと
むつねうりはらうとにきくえてをう。
十五日ハ女ちグゆのせくまある。かゆの本ひき
かくと家のだち女房むらのうかぶふをう
たれどとよういふてつねにうらを心づうい
あうらうらきまをうきにいうふあてくらあ
かあうんうちあてたうはいとドうけうありと
うちうらういこらもいとをくまねうてあひ
たうらうとつりや。こらうありあうらうらうかふふむ
このきくまどれうちうへやうのうほどをうら

かとはるくハ
侍達をうきよ
て不安かのを
よハあらば。

うとみハカク
ベツニベツダ
ンニちどりみ
さあり。

とあるく。とこらうらなてくれハと行もいたる女
房のれぞきおくのうこよたすまふを。前よお
とる人。心えてわらふを。あなうあくとまねき
かくまど。まきこゝろ。すがほりて。おわどらうて
あさまへり。う。やう。相とる侍。んまどいひよ
り。う。まらちてよら。ま。あるかぎ。うららふを
とこ。君もみくうら。ずあ。いぎ。わうづき。て。急みこ
ろ。う。ふ。おどろ。う。む。か。ほ。ま。う。あ。う。み。く。あ。こ
つぞう。い。め。う。い。う。ち。う。心。よ。う。あ。う。ん。が。き。と。う
たち。う。ち。つ。う。人。を。の。ろ。ひ。ま。か。ぐ。ま。く。い。ふ。を。

申文ハ。諸國の
守介。椽目。まど
を望む。辨状。ふ
り。

奏しゆへハ。天
子へ申上。玉へ
く。啓しゆへハ。
皇后へ申上。て

か。内さ。た。う。を。ど。や。む。ぶ。こ。と。る。ま。ま。う。ハ。み。か
こ。ぶ。ね。て。か。こ。ま。り。る。除。目。れ。ほ。ど。ま。ど。う。ち
こ。た。う。ハ。い。と。を。う。雪。ふ。り。う。ほ。り。わ。ど。ま。う。こ
み。ま。う。う。ぶ。ま。も。て。あ。り。く。四。位。五。位。わ。う。や。う。に。こ
あ。ち。よ。げ。や。う。ハ。い。と。た。め。ま。う。げ。る。り。老。て。か
ら。志。ろ。き。か。ど。が。く。ふ。と。う。く。あ。ん。ふ。い。い。ひ。女。房
の。つ。げ。ね。ふ。よ。り。て。お。の。の。が。身。の。か。こ。ま。き。よ。う。を
ど。心。を。や。り。て。と。き。聞。え。ら。を。わ。う。き。ん。ハ。ま。ね
を。志。ろ。う。へ。ど。い。う。ぞ。う。志。ろ。ん。よ。き。に。そ。う。い。ぬ
へ。け。い。あ。へ。ち。ど。い。い。て。も。え。く。る。ハ。よ。う。え。ど
浅。ぬ。う。つ。を。い。と。あ。そ。し。る。れ。

と。取次をさのむなり。

糸もちりて。後。此花ハ。檜柳。両説あれど。柳の花のうこよろ。うろべ。程くろくハ。怪言解よりふべし。

三月三日うらくとのどうみてり。つる。も。の花のいまさきさ。むろ。柳を。い。を。き。つ。そ。ら。おれ。を。ほ。も。ま。ゆ。ふ。つ。り。た。う。を。う。れ。ひ。ろ。ご。り。た。う。い。ふ。く。花。も。散。る。後。い。う。た。て。ぞ。ん。申。ら。ね。も。ろ。く。さ。き。た。う。さ。つ。ら。を。さ。ぐ。く。を。り。て。お。ほ。き。か。ら。花。が。め。ふ。さ。う。た。う。こ。を。を。く。は。ま。檜。の。を。ほ。い。い。づ。う。ち。き。志。く。ま。う。い。ど。み。も。あ。れ。ほ。せ。う。との。君。達。も。あ。れ。を。こ。ち。う。く。あ。て。も。れ。を。ど。う。ち。い。ひ。た。う。い。と。を。く。その。わ。り。み。と。り。む。の。ひ。と。ひ。つ。き。い。う。つ。う。う。て。と。び。あり。く。いと。を。う。い。

祭の比。まつりハ。國。了。所。ふ。あ。る。ま。ね。ど。何。の。祭。と。い。え。で。と。ま。ら。り。との。み。り。ふ。ハ。か。後。の。祭。も。て。四。月。中。の。酉。の。日。なり。

まつりのころぞい。う。う。を。う。き。本。ど。め。らの。葉。も。ぶ。ま。ぐ。う。い。な。り。て。わ。り。わ。り。あ。を。み。ら。ら。に。う。い。も。も。き。り。も。へ。だ。て。ぬ。そ。ら。の。う。き。の。な。う。と。あ。く。そ。ろ。み。を。う。き。み。も。う。く。も。り。た。つ。夕。は。う。い。よ。る。た。ど。志。の。び。た。る。ほ。く。き。ん。の。と。な。う。そ。う。か。と。ね。お。ゆ。る。ま。ぐ。た。ぐ。く。志。き。を。き。つ。つ。け。た。ら。ん。何。が。ち。か。ま。せん。ま。り。ち。かく。かり。て。あ。を。も。ち。む。ふ。あ。お。な。ご。の。もの。ど。も。お。し。ま。き。つ。ほ。も。び。い。の。あ。い。い。建。く。み。か。ど。よ。う。ま。ぎ。づ。う。ま。つ。い。て。ゆ。き。ち。ぐ。ひ。も。て。あ。り。く。こ。を。を。う。れ。す。と。い。む。ら。ご。ま。き。い。ど。め。る。

けいーくつハ
二物あり。故よ
をまげさせう
らさせとい
へり。極の鏡ハ
まろし。

どつねよりもききしら見ゆわらつづめりーら
びらうあひつくりひてきりいさなるあえほこ
ろびうちみぎさうりーいさなるもあながけりーく
川などのをまげさせうらさせなごもてさ
らぎりーか其日ふちしーしをまぎしーりあ
りーもさうーあぬさうをどりてありーもものど
ものさうどききたてつれバ。いーどくらわうどさ
いふ法師などのやうに。ねりさほよーかこをさ
ーはれほらくにつけさねぬをどの女あねるど
のともさうつーろひあやしくもをうー。

おとくから物

四段

ことくまろも
のハ。俗よべツ
ダンナルモノ。
とつふこころ
あり。
こころぐるー
たれハ。キノド
クジヤワイと
いふさなる。
さうどものハ。
精進物なり。

かくらぬ山ハ。

法師のこととを。まこと女のこころバ。げまの詞
まハがまらびもどあまのさうり。
ねりまろし子を。法師あなしたらんこをいさ
心ぐらーくま。さういさのこころまきわぎをた
ご本のまらなるどのやうに忠ひたらんこをいと
いとほーたれ。さうどものあまきをらひいぬ
つをまわくさハ物もゆくーかろん女なるどのあ
つねをまらびどりのさなるやうにさーのぞかぜ
もあろん。それをまやまからずいふま。てげん
ぶささのうさ。いとくまーげあり。さうけらま
のうらぬ山さくありーほどよおさるーまきあ

行てえぬふも
なくなり。

こらドてハ固
ドてよて。ら
しみてなり。

生昌ハ中宮大
進。中宮御ハ
大夫亮大進少

も見志。あるまきとえ出きぬれば。かこ
ふよまれ。ときあくにつけ。やまげもす。いこ
くわづらふ人よか。やまて。もの。けてうずらも
いとら。い。き。ば。ら。う。ド。て。う。ち。ね。ぶ。ま。ね。ぶ
り。る。ど。の。み。ま。て。と。と。ぐ。む。ら。も。い。と。お。せ。く。い。ら
お。お。も。ま。ん。と。と。れ。い。む。う。の。ら。と。や。り。い。も。あ
う。い。や。ま。げ。あり。

大進生昌 五段

大進おま。ま。が。家。ふ。ま。の。出。せ。あ。ふ。ひ。ん
が。の。う。ど。は。よ。ら。あ。い。る。し。て。と。れ。より。清。こ
し。い。い。せ。ぬ。ふ。北。の。門。より。女。房。の。ら。う。や。ら。も。

進など。皆后宮
の官人なり
宮ハ皇后定子
の所より。中
関白道隆公の
所女。一条院の
皇后。教康親
王一品宮女二
宮などの所母
則法少納言の
主君を中まも
えんごうハ遣
送。う。て。い。ち。よ
む。し。ろ。を。あ。て。
人を通りせさ

ぢんやのねむり。やと。お。ひ。て。か。ら
つき。わ。ろ。き。く。も。い。た。く。も。は。く。ろ。も。ず。よ。せ。て。お
る。べ。き。もの。と。お。ひ。あ。あ。づ。り。た。ら。ふ。び。ら。う。げ。の
車。や。と。ハ。門。ち。い。さ。ら。れ。ば。さ。り。て。え。い。ら。ね。ば。
ま。い。の。え。ん。だ。う。志。き。て。お。さ。ふ。い。と。あ。く。い。ら
た。く。い。れ。ど。い。う。も。せん。殿。上。人。地。下。や。ま
陣。ふ。う。ち。を。ひ。え。も。ね。う。し。新。お。ま。あ。の。ま。て。あ
り。つ。や。う。け。い。も。れ。ば。こ。う。ふ。も。人。も。ん。る。ま。ど
く。や。い。あ。ど。う。も。う。ち。と。け。つ。と。わ。ら。も
せ。ぬ。ふ。と。れ。ど。そ。ま。い。皆。め。あ。ま。て。侍。進。ば。よ。く。志
大。そ。う。結。ら。ん。み。こ。を。お。ど。ろ。く。人。も。結。め。さ

すまひなり。
活本よ侍らむ
しもぞおどろ
く人も侍らん
とあるうとよ
ろし志もぞハ
カヘツテとい
ふまなり。

門の限を言く
作りたるハ干
公高門の故事
新漢書よ見え
たり。
進士ハ文章生

てもうさうのりある家ふくまひくぬ門やあ
らん。ええはわらもんたどいふほどみもこれま
わらぜんとして御現をどさういふのでいとまら
くこそおそろしくれをどてり其門せざくはく
りてすまひのひくさどといへむわらひて家のほ
ど方のほどふあをせて侍らなりといらふざれ
ど門のうざりをたたくつくりたる人もきこゆ
らいとしくむあなをそらうとわらるきそれ
はうていこくがらとにこそ侍らあまふもきこ
んふかどふ侍らむいけぬり志るべくも侍ら
ざりけり。たましく此まちふまかりいりふられば。

をへ及身して
於よりおろ
う漢学生を
いへり。
さつぎつるハ
とつくバハハ
文字かろく心
ゆべし源氏野
かよ夜ハやど
深うらんハと
て起ぬふなり。
とあるハハド
子回トと岩崎
美隆いへり。
あしげハ別ノ

かうだふわきまへられ侍らるといふその御ま
ちかこからざありえんだう志きたまはばあ
おちいらてさつぎつらとといへむ雨のふり侍
まは。あふさむ侍らんよしくまをねせうくべ
き事もぞ侍らますかひとち侍らんとしていぬが
よ事ほどなりまらうがいつらうおどつはとと
とせぬふあらむ事れいらざりつたこといひ侍
つと申ておろぬおれどつおねますむさうき人
とまらうてよろげのうとも志らずぬぶとられ
むみおねぬ東のたひのひさうかけてあ
らふめさうとふさうけげぬもかくりたるをそ

下デハゴザリ
マセヌ。ふどい
ふさより。
かれをみとら
もの、こゑを
一本よかれを
みとらささぎ
さうぢとあれ
どふわとら。
りの、三字ハ
衍るるべし。か
れをみとら声
ハ細考ん。
爰マセぬ者の
ハ、爰マセぬ

れもたぐねむ。家ぬ、あまをあんふいをよくと
りてあけてうり。あやうかれをみとらもの、
こゑをさぶらつんよ、いり、とあまをたび
りよこゑよおどろきてこれまきちやうのうー
ろよたてうらうらだいのひりもあらいなうり。
さうどを五すぞうまあけく、いふまりけり。いみ
ぢうをうー。さらふかやうのすきぐ、まきささぎ
め小せぬもの、家よおの、まー、うりとて、むけ
小心よまうするをあり。とおもふまいとをか。
わがかこつらなる人をむらうて、かれえぬんか
うらんえぬものあめつをといへば、かいらをも

もの、こゑ、ゆ
めくと一本よ
あるハ、さう
けせうハ、拙の
あ、ハ、あるこ
うて、見證さど
の字音ささぎ。
ささぎハ、端を
せんとい。
ささぎよさぶら
せんハ、俗よソ
コヘマキリマ
セウカ。あり。
消息、こゑハ案
内をすらよと

たげと見やうていさうわらふ。あまハ、うそけ
せうふといへむ。あらむ、いんあ、うづねある
トと、定め申べきこと、のゆるさめといへむ。門の
事をこそ申つて、障子あけ給へとや、い、猶
其る申傳らん。そこよさぶらつんとい、う、めく
といへむ。いと見告き事。更よえおハ、せとと
て笑ふめまば。若き人をむけ、うりとて、引たて
ていぬ。後よ笑ふ事いみじ。あけぬとあらば、こ
だまら入ねか。消息をすらふよ、かありとハ、誰
かとい、とん。げよをうききに、つとめて御者よ
参りて啓されば、さう事もきこえざりつるをよ

おしてハ。辞して
てふて。云辞て
三さりしこ

ささんとい。惟
伸のほり親
をいつり

とねいしんと心とまのまきあられどいまあづか
お。御つぼねおさぶらまんとおしていぬまれど。
かへりまありたるお。さしてなごごとの路を
とれが中つる事をささんとまねびけい志て。わ
ごとせうをさしよび出べきことふもあぬを。
おのづからさづかよ。つほねおどにあらんよも
いつか。とてわらへど。おのぐとちみか。こ
しとあふ人のほめたるをうねしとねあふとて。
つげあらざるらんとの路とする御りきま
いとをか。

命婦翁九 七段

かうぶりの叙
壽して五位よ
ありさるこ
おとどハ。か
づきさるよ
て殿といしん
うご。

あさがれひハ。
清涼殿の御餉
の召して天子
おの御様を
きこしめす所

うへにさぶらふ御ねさハ。かうぶり路よりて命
婦のねととていとをか。けまどか。づかせ
路ふが。と。お出たるを。あとのうまの命婦。あ
るまを。お。いりぬ。と。よ。お。よ。き。か。で。日。の。さ
あ。こ。り。た。る。あ。う。ち。ね。ぶ。り。て。あ。こ。ら。を。お。ど。ま。と
て。お。ま。さ。ま。ら。い。づ。ら。命。婦。れ。お。と。ど。く。へ。と。い。ふ
み。ま。と。と。う。と。て。あ。れ。も。の。さ。し。お。か。り。た。ま。は。
お。び。え。ま。ど。ひ。て。み。ま。の。う。ち。あ。い。り。ぬ。あ。さ。が。れ
ひ。の。ま。に。う。へ。お。も。う。ま。ん。お。ら。ん。お。て。い。み。ド
り。お。ど。ろ。う。せ。路。ふ。ね。ら。は。は。ふ。と。と。ろ。あ。い。れ。さ
せ。路。ひ。て。を。の。こ。も。め。せ。ば。藏。人。た。と。ろ。あ。お

かり
てうどてハ微
しめて。ころ
しめてこ
さいなみてハ
シカラレテま
り
うしろへう
ハフアンシ
ナと坊がて
あり

りたるふ。此おきまをまらうちてうぶていぬ鳩ふ
つかいせ。たぶいまとおほせらうれば。あつまり
てかりさうぐうやの命婦もさいなみてあめのと
かへてん。いとうしろづた。とおほせらうれば。
かこまうて。おきも出さぬ。いぬのかり出た。
きぐちたぶ。ておひつかう。つあられい。うど
くゆるぎありき。つるものを。三月三日。頭弁柳
れうづら。をせきせ。ゆの花か。うにさ。せさ
くらう。ふさ。せな。志。てあやう。せほひ。を
り。か。う。め。え。ん。と。い。お。き。ひ。う。け。ん。や。と。あ。い
れ。ぐ。た。た。ら。の。を。り。い。か。な。う。ず。む。う。ひ。さ。ぶ。ら

さうぐーきハ
物のひとつと
らずしてさび
しきまあり

みうハやうど
ハ女官之兼輔
集よ。これハ井
でとつあみう
ちやうどよ。山
吹の花をまた
せて。色りきこ
る人のねこせ
うり。うら。り。つ

ふふ。さうぐ。え。く。こ。を。あ。れ。な。ど。い。ひ。く。三。日。四。日
み。さ。り。ぬ。ひ。つ。つ。う。と。大。の。い。と。く。く。あ。く。こ。え。の
さ。ま。ば。や。ふ。ど。の。た。の。か。く。ひ。さ。ま。く。る。く。お。か。あ
ら。ん。と。き。く。ふ。よ。ろ。け。の。た。ど。も。さ。う。り。さ。う。い。と
ぶ。ら。ひ。ふ。ゆ。く。こ。か。さ。や。う。ど。な。る。ゆ。の。さ。う。り。き
て。あ。な。い。と。う。だ。を。蔵。人。こ。ん。志。て。う。ち。給。ふ。志。ぬ
べ。う。な。お。き。せ。ほ。ひ。つ。つ。が。か。り。う。ま。あ。り。た。う。と
て。う。志。給。ふ。と。い。ふ。心。う。ろ。ず。や。お。き。な。ま。ら。な
り。だ。う。た。お。さ。ね。ふ。さ。ま。ん。う。つ。と。い。つ。と。せ。い
よ。わ。う。ほ。ど。に。か。ら。う。志。く。さ。き。や。み。ぬ。志。ふ。た。れ
バ。門。の。ほ。う。に。ひ。き。す。て。つ。と。い。つ。と。あ。い。れ。が。り

まづとまうけ
り。とあるを考
ふべし

えおしりたる
とあるしもド
ハ所あるべし。
まづとみのり
とてとい。身一
は急用とと作
られてありた
まふあり

なごさる夕つうた。いみじげふとれあさうげ
あるたのまびーげなるがわなうきありけむあ
それするう。かゝるいねやこのごろの足ゆる
かどいふよ。たきなまるとよべとみ。まも受い
まど。それどといひあうずといひ。くちくせバ
右通ぞん志□りうらよべとて。志もなるをまじ
とみのうらうてめせばおみたり。これのおき
なまらかといえせさせ給ふに似て侍まども。これ
そゆゑ。志げみこそ侍らぬれ。又おきなまるとよ
べとよるまびとまうでらうもの。をよべとより
こそ。あらぬるありそれともちこらうてまて侍

やみぬるの。ろ
やド一本よな
し。これよりし。
ぬるまてハて
まをいさかへ
り
つとめてハ。そ
次の目此終と
やくなり

りぬとこそ中つれ。さう相共の二人志てうたん
ふと。生ちんやと中せば。心うがらせ給ふ。くらう
さうておらませ。これくらうぬ。あうぬ。ものいひな
してやみぬる。つとめくはげづり。くおまうあか。
ちてうづまありて。はかぐみもとせて。ちらんず
まむ。さぶらふに。太のち。らのち。おつ。い。あ。さ
つ。を。あ。た。れ。き。の。ふ。お。き。あ。ま。る。を。い。ま。う。打。く
か。れ。志。ふ。う。ん。こ。そ。か。あ。け。ま。何。の。身。ふ。か。此。さ
びと。なり。ぬ。らん。い。う。み。わ。び。き。こ。ち。志。け。ん。
とう。ち。い。ふ。ほ。ご。ふ。此。ね。る。い。ぬ。ふ。ひ。わ。な。う。
き。て。あ。み。だ。を。た。お。く。お。お。と。ま。い。と。あ。さ。飯

らゝのをうー
きハ笑ふよも
責ららうよもあ
らげせするよ
りふーぎふも
ふやうの言こ
うへうもハ一
衆議のきうー
わーてうーら
せのひる翁を
足そなりーて
ありれがーせ

しざいこれ翁丸ふらそありらまよぶはかられ
志のびくあるなりけんとあまれうてをかしき
ことかぎりなきはかどみをもうちおきてさな
翁丸といふまひれあしていみづくちく御前よ
もうちわらハせ給ふ人々まありあつまりてお
近内侍あてがくなどおほせらるまはわらひ
のちあまをうへうもまきうーめーてうーらせお
いーあてあまのうーなるもかゝるころ
あつ物ありけりとわららせ給ふうへの女房と
ちなどともきうにまありあつなりてよぶもい
まぞたもちうごくはほおほるどをれたありもれ

さまのなり
おてうぜさせ
やハ合拍を
ど調けてうー
せんとうよえ
ふおくとせと
まどくもぬと
あゝ照るる
づー
かーこまりハ
馬の舎婦のか
しこまりかう
ハハ翁丸が
うトあり

てうぜさせをぬとつひむつひおひあうー
つなごわらりせ給ふよだうたるきうて大を
んおのかとよりまことあお結らんかれえ結ら
んとつひたれどあをゆーさるものちーとい
まどればさりとつひよえつくるをりも結ら
んそのみもえかくさせ給ふとつひなりさて
のちかーこほりかうトゆつたれてもとのやう
みなりみきなるほありれがられてあまひなき出
たかりほごうをよに志らどをうーくあまれを
りーかんこふもいれてなきあまごす

五節供 八段

うろく。中の日
とあるハ。漢文
よみあり
うのうれ山。百
葉集のよみた
がへよて名あ
らあは
ひその山のむ
ハ之の得みて
ひえの山るら
んといふはあ
り
新く山。六帖。
昔人一人をバ
我ハよそみえ

らひ路ふ。

山ハ 十一段

をぐら山。みかさ山。こめくれ山。こまれ山。
いりたち山。かせ山。ひとの山。かたさう山
うそ。誰ふおきけらふか。とをかりりれ。いつ
そた山。のちせの山。かさどり山。ひらの山。
とこの山も。わが名もらする。みうどのよませ
路ひらん。いとをかり。いぶき山。あさくら山
よそみえ。うらん。いとをかりき。いたた山。た
ほひれ山も。をかり。うんと。のすりのつかひな
ど思ひ出らるべし。たむけ山。ミこの山。いと

し新く山。の
雲井をうかほ
いりさち山。か
たさう山。かと
ため山。まど。い
づくこと。も志
られむ。これも
る葉集のよみ
たがへよてな
るべし
いやたうのこ
ね。いやたう山。
近江と後中よ
あり。その畧を
るべし

をかり。おとを山。待かね山。玉さか山。耳
なり山。末の松山。かつらき山。みゆを山。
は、その山。後山。きびの中山。嵐山。さら
しな山。をむすて山。をくほ山。浅ま山。か
たぐわ山。かへる山。いもせ山。

峯ハ 十二段

ゆづるその峰。あゝだの峰。いやたかのね。

原ハ 十三段

たか原。みかの原。あしたの原。その原。を
ぎ原。あま川の原。なり原。うなわこが原。
あべの原。志の原。

つむ市。可奈十
二。宗よとひ
さすおをつて
市の八十のち
すさふあへる
くやこれこれ
ハ大和くよ景
行紀は海石橋
市ありこれハ
を渡こ
心をええてハ
くろろをえせ
てなり

たつの市。 つむしちハ。 やまとふあすこあうか
かふ。 長谷寺よまうづる人の。 かならむとこふと
どまりければ。 観音の市えんあるふやと心こと
なり。 をぶさの市。 志かまの市。 あまかの市。
淵ハ 十五段
かーこ淵いかなるそ出の心をええて。 さる名を
つきけんといとをかり。 ないうそのふち。 誰ふ
いかなる人のをーへーならん。 あをいろの淵
こつそ。 またをかり。 蔵人かどの身ふたつて。 具ナ
いなふち。 かくれのふち。 のぞきのふち。

市ハ 十四段

淵ハ 十五段

かくれの淵。こ
ハ可奈集よ。 渡
の字を。 なむり
とよめるを。 か
くれとよみ深
て。 かく水の山
といへる。 類よ
て。 伊弉國名。 根
川の淵よ。 川あ
らざらう。
ころずまハ。 只
須戸へ。 ぶる山
を。 神ふら山と
つふ如し。 じく
りハ。 遠の志よ

玉淵。
海を 十六段
水うと。 よさの海。 かもぐちの海。 いせのう
み。
わたうと 十七段
志かすがれ渡り。 三川をの渡り。 ころとま
のわたうり。
みさききハ 十八段
うぶひまのさき。 かいハ。 ざらけとさき。
あめのみさき。
いへハ 十九段

てこゝみ出れ
べきよあゝ
万葉抄又大和
又雪の岡あり
其辺は垂仁天
皇のみささき
ありこれにい
ふよや
とうみハ洞院
之清和法をせ
がみとあり
又おき
こ一条 師尹公
の家にて山吹
殿ともいへり

近衛御門。二条一条もよし。ろめ殿の宮。せ
がみすがもとのみん。れいせい院。朱雀院。
とうみ。小野宮。こうむい。あがたのろど。
とう三條。小六條。こいでう。

清凉殿 廿段

清凉殿のうらとられす北のへだてなり御
さうどにハあらうみのかたいきたら物ども
おそろげなる。ちふがあしながをぞかされた
らうへのみつぼねの戸おしあけられむつねお
めいんゆるをふくこふどしてわらふほごにハ
うらんのむとにあをきかめのときあうとあて

と抄あり
清隆子ハハの
ハもど一本よ
を。なまきと
よろ
うへのみつが
ねハ后女侍を
どのまう此が
アゆふ時うり
そめ此休息所
ありと抄あり
まがごと
大納言どのハ
中園白道隆公
の所子中宮定

さくらのいとどく。おりりきえごの。五人が
りまをいとおほくうをれバかうらんのも
とまでとげれさきさるにひらつかと大納言殿
さつらのまほりの。さうちよらかるらふ。こき
むらさきのさぬき。志ろき御どとも。うへみこ
きあやのいとあざやかあるをいだしてすあり
路へり。うへのこまこみおし。ませば。戸ぐちの
まへまほをきいた。きふみ路ひて。ものなご
さうし路ふ。みものうちみ女房。さつらのからぎ
ぬども。くつろかふぬぎたれつ。ふぢやまぶき
かどいろく。このもくあま。こまどとみの

子の内見の後
は後同三司と
なりゆへり
くつろくにハ
ゆるやうふん
けをひなどを
後言集後よひ
らふよハけい
ひつなどを
くといふまき
こゆとありさ
る一本もある
よやげをひよ
てハすこーお
ざやにならぬ

みさよりおし出たるほど目のおましのかさに
おりのまわつあーおとたうけとひなどを
をといふまきこゆうらくとのどかちる目の
けいきいとをかしきふまての御をんもたる花
くすありておもめそうもればなかの戸より渡
らせ給ふ御もに大納言殿まおらせゆうてあ
まつる花のちとふかへりみ給つる宮の御ま
のたまちやうおしやりてまげーのちとよ出さ
せ給つるまきだうなまごともなくよろづふあ
でたまきをぶらふ人もおまふ事あることちす
うふ月も目もかちりゆけどもひさふらみむ

月も目もかち
かゆけども久
よふらみむろ
の山のとこま
不ば新新勅撰
変言へ又ま
集よハ長能の
寄十首の中よ
いねり
古硯のまきを
れと佐らる
ハ。一条院の法
お納言よ中付
ゆあるり
不どまき目も

ろの山のといふぬるうとをゆうかみうちよ
み出しての給へるいとをかしとおまゆらげよ
ぞもまもあまげあるは有ねあやといぜ
んつかうまつる人のをのこどもまどめす秘も
なくわたらせ給ひぬまきをまけすまはれとお
ほせらるふあまをそらふのこふてたうね
ますをのみ見たてまつれまほどまきめもま
かちつごーまらまきまきおーたみてこれおた
ごまおぼえんまらまきまきおーたみてこれおた
せらうくとみお給へるにこまいんかよとせ
ばとくかきてまおらせ給へるのこいこうとく

それらつづし。は初きこえがう。抄よ。初よ千とせもあらまふし。とまむらうし。申言ふも。目をたむつべし。とん。手車もといへるを。極をきと。いひふ。うやとあり。は古今集巻上。は深殿の石の由。初よ。花が

へさぶらふづきもあらざとて。は硯とりねるして。とくく。たぐおむひめぐらさで。たぐり。し。げもなふも。ふとおほえんことを。とせめさ。せ路ふふやむとさとおくせし。あか。とぶくおむて。さへあかみくぞ。ねもひみだぐ。や。雲のうた。花の心やむと。さつあくも上らふ。こ。ひ。うきて。是よとあるふ。可。し。あれどよ。い。い。老ぬ。志。う。い。あれど。花を。し。え。ま。ば。物。お。ひ。も。あ。し。と。い。ふ。こ。と。を。君。を。し。これ。を。と。か。き。あ。し。た。る。を。市。らん。志。て。た。ぐ。心。を。つ。ど。も。れ。ゆ。う。か。り。つ。つ。ど。と。ね。ほ。せ。ら。う。つ。い。で。ふ。志。ん。ゆ。う。

め。は。橋。の。花。を。さ。さ。せ。ゆ。へ。う。を。え。て。よ。め。る。車。ふ。色。は。云。と。あり。今の関白ハ。中守の御。又。中関白道隆公。く。は。の。と。つ。は。お。柳。よ。万。葉。の。身。くと。あれ。ども。万。葉。よ。い。や。し。但。川。上。の。い。つ。もの。花。の。い。つ。も。く。き。ま。せ。こ。

あんのほ時。所。前。よ。て。さ。う。し。あ。う。を。ひ。と。ら。か。け。と。殿。上。人。ふ。ね。ほ。せ。ら。れ。け。つ。を。い。づ。う。か。き。ふ。く。と。ま。ま。ひ。中。人。と。あり。う。る。さ。ら。ふ。ま。れ。あ。し。よ。よ。と。歌。の。を。り。ふ。あ。も。と。と。ん。を。も。志。ら。と。と。ね。ほ。せ。ら。れ。た。れ。も。わ。び。て。み。ま。か。き。け。つ。申。ふ。只。い。ま。の。関。白。殿。の。三。位。の。中。將。と。受。え。ら。う。時。志。ほ。の。さ。し。づ。も。の。う。ら。れ。い。つ。も。く。君。を。ば。ふ。く。お。も。ふ。と。や。う。が。と。い。ふ。う。た。の。ま。志。を。た。の。む。を。わ。わ。の。と。か。き。路。へ。り。た。ら。を。さ。ん。い。み。志。く。わ。で。さ。せ。路。ひ。う。ら。と。お。ほ。せ。ら。ら。う。も。ま。志。ぐ。る。ふ。あ。せ。あ。ゆ。る。心。ち。ど。志。け。る。わ。か。う。ら。ん。人。ら。

がせことき
げめやもとあ
る哥の辨誤せ
るよや
あいなくハム
サト。ラチモナ
ク。まどいふ言
あり

宰相の君ハ。中
宮の宮女よて。
上藤と見えた
り。おく小富小
孤左大臣の庄

さもえか。くまどき。このさ。は。う。や。と。ぞ。お。ほ。
ゆ。つ。れ。い。ひ。と。よ。く。か。く。人。も。あ。い。か。く。こ。あ。つ
は。ま。れ。て。か。き。け。が。い。な。ど。あ。ら。る。も。あ。り。古。今
の。さ。う。い。ふ。を。は。ま。し。ふ。お。お。か。せ。給。ひ。く。歌。ど。も
の。も。と。を。お。ほ。せ。ら。れ。て。こ。ま。だ。が。ま。あ。い。い。う。ふ
と。お。ほ。せ。ら。る。ふ。も。と。て。よ。う。ひ。つ。心。ふ。か。く。ま
ね。ぼ。ゆ。も。あ。り。げ。ふ。う。く。お。ほ。え。も。中。出。ら。れ
ぬ。事。い。い。か。なる。事。り。宰相の君ぞ十バカ。そ
れ。も。お。ほ。ゆ。う。か。と。ま。い。く。五。つ。六。つ。あ。ど。と。た。だ
お。ほ。え。ぬ。う。を。ぞ。け。い。ま。げ。け。ま。ど。さ。あ。と
け。ふ。く。お。ほ。せ。ま。を。も。え。な。く。も。て。な。す。べき。

孫とあり。左衛
門佐重輔の女
なり
村上の云々よ
り。中宮のむら
し。お。ほ。せ。ま。せ
ぬ。ふ。あり
小一条左大臣
ハ。師尹公よて。
貞信公の五男
あり
一よハ。お。よ。ひ
と。つ。よ。ハ。と。よ
める。ハ。た。が。つ
り。い。ち。ふ。ハ。と

といひくちを。が。う。も。を。か。い。志。る。と。中。ま。も。人。を
ま。を。バ。や。が。く。よ。み。つ。げ。く。せ。給。ふ。を。さ。て。これ
え。ま。ち。あ。る。事。ぞ。か。い。あ。ど。か。つ。た。を
く。ハ。あ。ら。ど。と。い。ひ。を。げ。く。中。ふ。も。古。今。あ。ま。さ
か。き。う。つ。い。た。ま。ど。ま。も。人。も。み。る。覺。え。ぬ。べき。と
ぞ。か。い。村上の時時。せん。え。う。で。ん。の。女。御。と。き。こ
え。け。う。ハ。小。一。条。の。左。大。臣。殿。の。お。む。を。め。お。ほ。せ。ま
お。ほ。せ。ま。を。さ。ま。さ。う。と。志。り。き。こ。え。ご。う。ん。ま。だ。い
め。ぎ。み。ま。お。い。け。う。時。あ。ら。お。と。を。れ。を。い。へ。ま
え。ま。を。給。ひ。く。ハ。一。ふ。も。は。ま。を。あ。ら。ひ。給。へ。つ
ぎ。ふ。も。き。ん。の。は。こ。と。を。い。か。で。人。ふ。ひ。き。ま。さん

新編 源氏物語 卷一

よむべし。身一
おいとつふえ
なり

古物語の事ハ
源氏物語河海
抄ふんちく
見えたり

とおぼせ。さて古今の事二十巻を言なりかべ
させ給もんをほかくもんもせさせ給つとな
ん。すえさせ給ひら。ときこしめし。おろせ給ひ
て。古物語の事ハ。古今をかく。志て。もて。わ
たらせ給ひて。例をら。ま。ほ。ま。ち。や。う。を。ひ。き。た。て
させ給ひら。ま。バ。女。海。あ。や。し。と。お。ぼ。し。ら。に。は
さ。う。し。を。ひ。ろ。げ。さ。せ。た。ま。ひ。て。その。や。し。其
月。お。ふ。の。を。う。その。人の。よ。み。た。う。い。い。か。み
と。同。す。え。させ。ぬ。ふ。か。う。なり。と。心。給。させ。給。ふ
も。を。う。し。ま。物。の。ひ。が。お。や。え。も。し。忘。ら。る。る。も
あ。ら。バ。い。み。ど。から。べき。み。と。り。り。な。く。お。ぼ。し。

碁石志て云々
ハ。帝の女師の
覚えぬハ。ぬ。不
も。あ。る。バ。ま。教
をと。し。せん。と
て。碁石。も。て。教
と。れ。と。女。房。た
ち。よ。ま。え。つ。け
させぬ。ぬ。
さ。う。し。う。や。が
て。云。ハ。女。師
の。さ。う。し。げ。ふ
一。首。を。皆。し。中
させぬ。ふ。り。あ
う。り。し。う。ど。ん

碁石志て云々。おぼし。ぬ。人。ふ。ら。う
み。たり。斗。言。出。て。碁石志て。教。を。言。せ。ぬ。り。ん。と。て。
す。え。させ。ぬ。ひ。ら。ん。ほ。ど。い。か。み。め。で。う。く。を。う。
う。と。らん。ほ。お。よ。さ。ぶ。ら。ひ。ら。ん。人。さ。つ。ら。を。う。ら
や。ま。し。ま。ま。せ。め。て。中。させ。ぬ。ひ。ら。れ。バ。さ。か。う。
や。が。て。ま。ま。ま。ま。で。な。ど。い。あ。ら。ぬ。ど。ま。ま。づ。て。け。ゆ
た。ぐ。ふ。事。る。か。り。ら。り。い。う。で。や。う。ほ。ま。さ。う。お。ぼ
め。か。し。く。ひ。が。こ。う。こ。ん。付。て。を。や。ま。し。と。ぬ。さ。き
ま。で。お。ぼ。し。け。る。十。巻。よ。も。あ。り。ぬ。さ。う。に。ふ。よ。う
や。う。ら。り。と。て。お。ぼ。し。う。し。み。け。う。さん。志。て。み。と。の
ぐ。も。り。ぬ。る。も。いと。め。で。た。う。か。い。いと。久。志。う。あ

新編 源氏物語 卷一

初巻
細巻
一

けうさんハ夾
筆とらきて書
をこらすて見
たりとさしお
く物よて竹よ
て能るこ抄の
説いたかつり
ことをまどハ
そののさまを
世の言いと深
居の説え抄み
ハ異本をま見
合せて内務古
もあらしと帝
の御行一り

りておきさせ給へるふをほこのことさうなく
てやましいとつらうるべしとて下の十巻をあ
まにもあるべしとをもぞん給ひあまもさるとて
こよひさだめんとおわとあぶちかくすみり
ておふくらすでふんよませ給ひくろよれど
つひふまげきこえさせ給はずなりみりり
へうたらせ給うてのちかつることなんと人々
殿中たてまつりけきバいづらうおぼしきわ
ぎておどぎやうなどあまこせさせ給うてそあ
たふむういこをんねんどくらすさせ給ひくろ
もさきづく志くあそれなることなりなるとか

てことあり
えせものハす
べて物まきぐ
れぬさく抄云
中まの所抄語
を承りて女房
の中昔ハさ
やうの女房を
いよ限らむ下
つくりもおお
がえあどのか
たを教多たり
しとく

たり出させたるふうへもきこつあしてあせさ
せ給ひいうでさおほくよませ給ひらん我ハ三
まき四巻ごふもえよみをてととおほせらるむ
かハえせものもみなときをかいうことあり
けれこのごらうわうあることとおほきこゆるか
どお前ふさぶらふんうへの女房れらなとゆ
ろされたるやどすみりてくちぐふいひいでな
ど志たるほどそまうととおおふうとなくこうを
おぼゆ建おひさきなくすあやかふえせざんえ
ひるどみくみらん人ハいぶせくあなづらそ
しくおもひやられて程さうぬべからん人のむ

枕
草
紙
巻
一

内侍ハ掌侍之
令子掌侍四人
とあり尚侍典
侍掌侍の中よ
ぞうこ
ありくまきハ
あてあわつ
けきのあこよ
おまじ俗子ア
ワテルブシツ
ケナぞどつあ
さこ
上達部ハ公卿
なり位ハ三位
以上官ハ参議
以上をつあ
をさめハひす

さあやどとこまらハせ世のなかのありさ
まもんせならハさ中ほうう内侍をどみても志
ぢあせせやとこそおがゆれみやづうへす
多人をバあむくまうわろきことふ忠居る
男こそいとふくけきづふそ女中たさうすどか
志かけまくもかこきおまへをまどめをり上
達部殿上人四位五位六位女房いさふもいと
まんぬ人いさくるくこそはあめ女房れん
ざともそのことよりくるものどもをさあか
らやうどたびうがいらとつふまでいつかそ
れをまぢかくれたりしものむらなどといとさ

まーともいひ
ていやしきお
をえ扱ふ女こ
たびーがいら
ハ元補集よみ
がくらん玉の
光をたのむ
教ふもあぬ
たみーがいら
もとあつて
考ればたいハ
磔の古語ハ
らハ尾なり磔
尾の如くいや
しき若なるべ
しと後世の伝
あり

ーもあらむやあらんそれもあるかぎりハさど
あらんうへやどいひううづきと魚たるふ心
よくからずおぼえんことわりなれど内侍の
けるどいひてをましくうちへまありまの
つかひあどに出たもおもたごからむやそ
あらむてころもあたる人いとよまやう
け五せちなどいづきをりざりともいひたりひる
びん志らぬ事人ふとひきまどとせどとこ
ろふくまものなり
すさまじきもの 廿一段
ひるほゆる犬 春のあどろ 三四月の紅梅の

すまじき物
ハスゴイッウ
ツリナ不真ナ
ツキナイ。あど
つふらろこ
ふよーに女子
の字考うてを
みるのふこ

かきうてー
一本よぬひーた
てー。やりつる
とあり。
この文借札

きぬ。ちごのぢくなりたるうぶ屋。火おこさ
ぬ火をけもびつ。うーーみたろうーかひ。
まかせのうちつゞきふよーうませたる。かこ
たぐへふゆきたるに。あるどせぬおすーてせち
ぶんとまじまじ。人の國よりおこせつる文の
物をまじ京のをまじこそいおもふらめども。それ
どそれとゆい。まじこそをまかきあつめ。世みあ
るまじをまきけむよー。人のもとふこまじよ
げふかきたる。やりつる文の。かつり事見ん。今
はきぬらんかーと。あやましくおそまじとまつほほど
ふありつる文のむじひたるもたるとまじ。いとま

あまべー。とま
ト耳ごちこ
うへよてよを
つたたぐへり。
おそまじハおそ
いとまじつるど
ふとあるべき
こ。

たまげふもちたうーふくだめでうへふひきたり
つらまじまじくまじえたるを。おこせたり。たり。おハ
ーまじまじりたりともまじハ。物いとまじとまじい
れど。まじもてか。つりたる。いとまじびくまじま
ト。まじ必くまじ人のもとふ。事をやりてまじ
ふ。ふくまおとすれまじまじり。とく。出て見る
に。まじまやどりみ入て。まじまじまじまじまじ
まじを。いおまじまじまじまじまじまじまじまじ
わ。つりまじまじまじまじまじまじまじまじまじ
又家ゆまじりて。つりたる。まじまじまじまじまじ
まじまじまじまじまじまじまじまじまじまじまじ

和歌集
卷一

あうらさまハ
ありそわよふ
さりの家いと
まをこひて出
みへ

りりきしこく
ハユノウヘモ
ナイとりよき
まり

りていつまうと思ふもいとほいな。ちごめ
めのとたうあからさまとていぬるをむとむれ
バとかくあそげなぐさめてとくこといひや
りたるふらよひいえまあるまどとてかへお
こせたるまもさやまのこふもあふむふくさわ
りなり女をどむらふるをここおきていかるら
ん。まつくあつふ夜少くふけて志のびやか
に門をたけむむね少くつふきて人出るとい
まらにあらぬよしなきものさの思きてきこ
るこそとさまとといふ申もかへもぐまさま
トけれ。験者の物のけてうざとていみどう志

とらやぶら
どもうせて
抄云。宿館珠教
るどよりま
み持せて心

ひさひより云
と。後居云。こ
のさまを考ら
お毛詩よ。橙頭
跡。とあるよ
同トく今もす
ら申まで。こま
りうら時。以を
かくさまし

たりがほみどらやぶらどもをたせてせむら
み志ぼり出しよみあうれどいさかよりげも
かくごほふもつうねをあつめてねんどあふる
み。男も女もあやしと思ふ。時のかゝるまぐてよ
みこうおて。さうらふつかむ。たもらねとてむら
かへてあまどげんやとらちひてひさ
よりかこごまおがいらさぐりあげて。あくびを
木のれうち志てよりふぬ。ぢもくみつか
さえぬくの家。うといみとききて。さやうあや
しものども。ほのくなりつら。かこあなかな
むものども。皆あつまりきて。出入車のなが

枕草子
紙巻
一

枕草子 卷一

まつり曉まで
抄云除目の果
る曉く外宮の
除目ハ九日よ
り始て候之と
江次第ハあり
三日おこなひ
る事あるま
は終りの曉ま
で有り。

まことよとの
みけるもれハ
そ人の父母書

えもひまをく見えおまうでまら供もも。家もく
とまありつううまつり物くひ酒のみめ。あ
あへるふ。つう。曉まで。門た。く音もせ。あや
あ。るど。耳。こ。て。ま。け。む。さ。お。ふ。声。こ。して。上。達
部。など。皆。出。候。ふ。もの。き。ふ。宵。より。さ。む。づ。り。わ
た。う。き。を。り。つ。づ。げ。ま。を。の。こ。な。ど。い。も。の。う。げ
あ。あ。ゆ。こ。る。を。ま。る。もの。い。と。ひ。だ。あ。も。え
と。ま。ど。外。より。ま。き。る。もの。も。ま。ど。ど。殿。も。何。お
か。あ。ら。せ。候。へ。る。ま。ど。と。あ。い。ら。つ。も。と。か。あ。の。せ
ん。ど。ふ。こ。そ。い。と。か。あ。ら。ざ。い。ら。ふ。誠。あ。た。の。み
け。る。もの。い。み。ど。う。な。げ。う。と。思。ひ。た。り。つ。と

子をどろろと
つとめて抄云
除目もての
物もやくと

返しせぬの下
あいとつきま
し。されどとい
ふきをまうくめ
と。

むうしおがえ
てハ人のいひ

めておなりてひまをくをうつるものも。やうく
ひとりのふたりづ。ま。ぶ。り。出。ぬ。あ。う。き。もの。つ。さ
も。え。ゆ。き。ま。あ。ら。ま。の。ま。ど。ま。は。来。年。の。く。み。ぐ。を。手。を
を。う。て。か。ぞ。い。た。ど。して。ゆ。る。ぎ。あ。り。ま。た。も。い
み。ど。う。い。と。ほ。う。す。ま。ま。ど。げ。な。り。よ。ろ。う。う
よ。う。た。う。と。思。ふ。歌。を。人。の。も。と。お。や。う。い。ま。よ。返
し。せ。ぬ。け。さ。う。お。み。い。か。せ。ん。それ。だ。ま。を。う
を。か。う。う。な。ど。あ。る。か。つ。り。ご。と。せ。ぬ。も。心。お。と。り
ま。又。さ。わ。が。う。う。と。ま。あ。か。う。き。お。よ。う。ち。あ。る
め。き。う。る。人。の。お。の。が。つ。ま。ぐ。と。つ。と。ま。あ。る。ま。う
に。む。か。う。お。ぼ。え。て。ら。と。な。う。ま。り。な。さ。哥。う。み。う。て

枕草子 卷一

枕詞 巻一

くさゆる用意
ま度あり。
家の小窓。お云。
雨面ハ。晴の雨
とまると急よ。
お面ハ。さやで
つらうもぬえ
なり。
おハ。おうさの
誰か。あまの
いへり。
新提。お。お。す
る。墨。お。お。ら。こ
ま。う。お。お。ら。お
の。と。う。く。お。お
の。う。さ。さ。き。も

人小あぢづらう物 廿三段

家のきたおむて。あまう。い。う。き。と。人。小。あ。ぢ。づ。れ
たる人。と。と。老。う。う。相。又。あ。ら。く。志。き。女。つ
ひぢのくづれ。

ふくきお上 廿四段

いそぐことあるをりふ。長。ご。と。ま。る。中。ら。う。ど。あ
た。ら。ら。い。き。人。さ。う。ば。の。ち。お。る。ど。つ。ひ。て。と。ね
ひ。や。り。つ。べ。け。き。ど。さ。す。ぐ。ふ。心。ま。づ。う。き。人。い
と。ふ。く。い。硯。お。髪。れ。い。り。て。ま。ら。れ。た。る。又。墨
の。さ。か。よ。石。こ。ち。り。て。き。し。く。と。き。う。み。た。る。お
そ。か。お。わ。づ。ら。ふ。人。の。あ。ま。お。ぐ。ん。ご。も。と。む。う。か。

う。い。ぢ。ぢ。こ。の
あ。ま。う。り。て。よ。あ
ま。あ。ま。う。い。

こ。う。ど。ハ。園。ド
て。ま。て。く。さ。び。れ
と。ま。し。
え。ぐ。ら。う。は。信。臣
云。難。ご。ら。志。を
う。べ。い。季。守。ハ
何。を。も。心。守
於。よ。お。り。あ。ま
づ。い。と。云。り。

れ。い。あ。ま。お。よ。と。あ。う。で。ほ。み。お。あ。る。尋。ね。あ。り。く
程。よ。待。ど。ほ。み。久。し。き。を。か。ら。う。ぶ。て。す。ち。つ。け。て。
よ。ろ。こ。び。な。ご。う。か。ぢ。せ。さ。さ。る。ふ。此。ご。ら。も。の。い
け。お。こ。ら。う。ど。お。け。る。よ。や。あ。ま。う。い。お。ま。お。ま。ち。ね
ぶ。り。ご。ら。よ。や。う。た。る。い。と。お。ら。い。ち。ん。で。う。こ
と。ま。き。人。の。さ。さ。ら。お。え。が。ら。お。拍。い。う。う。い。ひ。た
る。火。を。け。も。び。つ。な。ご。お。手。の。う。ら。う。ち。か。つ。い。
志。お。お。の。づ。か。ど。う。て。あ。ぶ。り。を。る。お。ね。い。つ。う
を。わ。ら。わ。り。る。う。人。を。ど。の。さ。と。志。を。り。い。お。い。ど
み。う。た。て。あ。ま。お。ね。こ。を。火。を。け。の。も。こ。よ。あ。い。を
さ。く。も。う。げ。て。お。ね。い。ふ。お。う。い。お。う。い。お。う。い。お。う。い。

枕詞 巻一

さきらめはつ
がつりすらめ
うて、まハ術を
まぐり。

さきしなりハ
さやうふ、なう
うりしとこ。

くらしきふびそ
口とるまよとて
解く人よある

さるらめさやうのものハ人の中をいきて、あし
とさるをさすらあまぎきてちりそつひをて
みとさだまらむひろめきて、かりぎぬの前ま下したさ
すま、まくりいきてもみるか、かぐるあとい
ひうひなきもの、きまふやとおもふど、サよ
ろしきもれ、式部太輔駿河の前司をいひ
がさせしあり。又酒のみとあかき口まじり
ひげあまものそまをふで、杯はつ人ひとふとらさる
程のけしきいみどくふくしとみゆ、又のあをど
つふをまぐり身ぶつひま、がらふりくちわ
きをさくひきをきてわらうづのかうどのふま

みし、吻又唇ま
どとり。

かうどのハ守
殿國の守をい
ふたるべし。

うふハ、然よ
て、臺の圖符ハ
まありてうと
へごとまら如
く、さけもなき
るよあうそハ
ハ、まひしれこ
る人のさよま
るべし。

ありてなどうたふやうにさる、それハもまこ
とふよき人のさ、さひしより、むづきなりとお
もふあり。相ううや、身のうちふげき人の上
いひ、つゆぢかりの事もゆう、がりまかほほ
がりて、いひま、ぬを、えんどそし、又僅ふき
きこつら事を、われもとより、さりたる事、や
うふ、こと人よも、かうり、さ、べつ、ふもいとみく
し。物まかんと思ふ、能ふなく、ち、島しまのあつま
りて、とびちがひ鳴を、忍びくく、人見、さりて
ほゆる、た、かうちも、ころ、つべし。さる、す、ら
あな、ら、ち、さる、お、ふ、かく、ふ、せ、さ、る、人、の、い、び、き

枕草子 卷一

昔あるが、お云
うてあるが、き
うらよか。

こそきおの、一
かよ、こもどお
おの、まきとあり。
こそ、い、今こ
もせと、つふと
の、あり。
たを、め、う、い、ご
ごめ、う、ふ、ご、お

あつる。又みとかよ思ひてくる不よ。長あぼ
あて、さき、さぐふ人よ見えと、とまどひ出るほどよ。
物おつき、さつりて、そよ、あとい、もせ、さる、い、み、ど
うふら。いよ、ま、や、ど、か、け、さ、る、を、う、ち、か、づ、き
て、さ、う、く、と、な、ら、し、た、る、と、い、と、ふ、く、も、か、う、の
す、と、ま、り、て、こ、い、き、物、の、う、ち、お、の、ま、い、と、さ、る
し、と、れ、も、や、を、ら、ひ、き、あ、げ、て、出、入、を、さ、る、は、う、う、に
な、ら、む。又、や、り、戸、あ、ど、あ、く、く、明、ら、も、い、と、ふ、く
し、が、し、も、た、ぐ、る、や、う、ま、て、あ、く、る、は、な、り、や、い、も
る、あ、く、う、あ、く、ま、い、う、う、ど、な、ど、も、た、を、め、う、ご、ご
ぼ、め、く、ご、さ、さ、る、く、れ。ね、お、た、く、と、思、ひ、て、あ、

い、ま、さ、ら、し、こ、は
や、い、ま、を、せ、さ
する、る、り、茶、花
物語、浦、の、別、よ
よろ、づ、を、ご、お、ち
さ、う、ひ、ご、ば、め、き
の、い、り、と、あ、る
よ、お、る、い、。

さ、つ、ま、く、う、い、我
ひ、と、り、オ、み、ら
し、く、い、ひ、さ、や
ま、を、り、。

た、多、小、蚊、の、ほ、そ、ご、あ、ふ、名、の、り、て、教、の、中、と、ふ、と
び、あ、り、く、そ、か、ぜ、さ、へ、その、程、あ、ある、こ、そ、い、と、よ
く、な、ま、い。さ、う、め、く、車、小、の、り、て、あ、り、く、もの、耳、も
さ、う、ぬ、よ、あ、あ、く、ん、と、い、と、ふ、く、く、我、の、り、さ、う、い
其、車、の、主、さ、く、ふ、く、く。物、語、を、ど、も、さ、る、ふ、さ、う、出
て、我、ひ、と、り、さ、い、ま、ぐ、る、物、総、て、さ、う、出、ハ、わ、ら、さ
を、お、と、ふ、も、い、と、よ、く、く。昔、物、語、な、ど、を、さ、る、ふ、我
志、り、さ、う、う、な、る、い、ふ、と、出、て、い、ひ、く、た、く、な、ど、を、さ、る
いと、ふ、く、く。氣、あ、も、り、あ、る、く、いと、ふ、く、く。あ
から、さ、な、み、さ、く、る、子、ども、わ、ら、ハ、べ、を、ら、う、た、が
り、て、を、か、く、き、もの、な、ど、と、ら、さ、る、に、習、ひ、て、常、ふ

枕草子 卷一

よふついでにあり
うらやまのあひ
りては居のさう
てうとやめや
かどい何なや
やとつふまゝさ
つとおふつ
まがごとし

まがあらんよ
てあるふどい
むりま婦よ
てあり中し

まをわひりててうとやうちうらぬるあらし
家もてもまやづかへわいともあつてありな
んと思ふ人のききたるふそらねをまうつるをわが
もとふある女れどもれだこよりききていぎ
たましと思ひ教よひきゆるがうらむいとふえ
くいますりのさうこえてものさうがほふを
しやうなるさういひうらみたるいとよ
し。わがあらんよてあるほぐもやう見し女の
事ほあひひ出なごさるも過てほぐへみけま
ど猶ふるさうてさうあたうたうんこそ思ひ
やらされさうとをれいさうもわらぬやうもあり

そふひるはくさ
めさうさつふ
ふひり時の頃ハ
拾芥抄よりんえ
り家の男さうハ
そ家の事さうハ

まのくしへはね
くしへを不吉
さうし

か。まをひく誦文さう人たう家の男さう
なうでいたうくまをひたるものいとふらし。
れどもいとふらしきぬのさたふをどりありき
てもたぐるやうふもさる。又たの諸聲ふるが
まがとなきあげたるまがくまくふくし。明て
出入とこらたてぬ人いとよらし。わのとれをと
ころとあき女いされど近くもよらぬさう。そ
のこづをばたぶわが物よまてまをひりやうま
てうららむいさうかま勢清事ふたがふものを
ばざんし人をむ人も思ひたらむあやうれ
どごれがとがをまよまかせていふ人をまひれ

いみどきおもち
ちまらよつきて
乳母のまはよく
しとおこさひ
はるふのおも
一本よよとあり
たのめふハない
グーちよん

とがえたるんハ
我方へ始るるこ
とより人のちと
へんのやるみの
初まてもよき
あり
後云男を
女がよより

バ。不えいみどきおもちちまて。事をねこなひを
どととるふ。

ふくきもれ下 廿五段

文とバなめき人夫そいふふれせきを
のめみかきやうたる詞のふくきこさぶるや
ま人のもやふあまうりかこまりたるもげふ
ろき事ぞれどわづえたらんハこうとより人の
もとならさふくこそあれださうさむの
ひてなめきハなどかといふらんとかさそら
いたし。ましてよき人などをさすものいふるハ
をこふていとふくし。をときうなごわろく

ふ詞うて男主人
とつふよこ下男
とまんとあふ
あふびよふも
見えたり
あいぎやうあ
とのハハハハ
つあぶさしを略
せり。此比よりの
俗語を今もい
ふことあり。

つふいとまろし。我つかふもれなど。わいもるの
縁ふるどいひたういとふくこつもとふ侍る
とつあもドをあらせどわときく事こそねほか
めれ。あいぎやうなくと。こととまをめきさどい
ハバ。いさう。人もきく人もわらふ。あくらばゆ
れどま。あまうりてうろうもるまどいし。ま
である人もわらきなるべし。殿上人宰相などを
唯るのる名をいさうかつす。げあらずいふ
ハ。いとかこもるを。げふよくさいとむ。女房の
局るる人をさう。あのおもときみなどいへば。め
づらかようれしと思ひてほむることぞいみど

つくりハ官之礼
まへハ帝之礼ハ
自稱多れども下
ふ向ひていひね
のれより言まの
人は終てつみ
ハせられり。

ま。殿上人公達を御前よりほりあていつかさ
いふ。又御前より物をいふとも。まきこしめさんよ
いあるどてうハ丸がなごいさん。さいとごさんみ
くし。かくいさんふらるるかろべき事か。こと
なることあきをとりはひきいれご急志てえん
だちる。まきつらぬ硯。女房の物ゆのうも
る。まきなるだおいとしもたぬハくぬ人
のふらげごとし。ひとり事みのりて物見
る男。いある物みかあらん。やむごとあららど
とも。このき男ども物ゆのう思ひするまど。
ひきのせても見えよ。か。まきうげふ。唯一人がく

かくよひて。い
るまきともまき
ぐく。かぐくひ
この得りハ。男葉
十一ふとせ。女
の陰よかぐく。ふ
まきとあり。

まのり申ハ。いご
うへうんといと
まこひせをあり。
かこくま。ハが
こくま。の得り
まきとあり。

よひて。心ひとつおまなりあ。うんよ。曉みか
る人のよべおき。扇ふところ紙とむとて。く
らけまば。さぐりあてん。とたきもわたり。あ
や。たどら。いひもとあ出てそ。ふくとふとこ
ろふ。こいれて。扇引いろげ。ふとくとうちつ
かひく。まのり申た。ふく。とハよ。結つね。いと
あいぎやうな。たかど。と夜ふかく。いづ
人の急げ。結をつく。ゆひた。さ。もか。さめ
ど。ともありぬ。や。を。ら。さ。ま。ら。さ。い。ま。さ
り。とも。人のと。む。び。き。こと。か。ん。い。ま。さ。う。ま。ど
け。を。う。か。く。る。く。ま。ほ。かり。衣。ま。ど。ゆ。ぐ。み。さ

と見ゆ人ハ名勝
そのみそしむ人
ハ古今集御遊
よそんよとてと
それバウリカ
くすれバあるい
ひふらにあふさ
きうさふ

りともたれかを見志りてわらひそしりもせん。
ととろ人ハおぼ暁のありさほこそをのしくも
あるべけれぞりあくまづくおおきがこげる
そ志ひてそぞのかあけ退ぬあな見ぐるし
どいそれてうちなげくけきまげよあふ手物
うきふしもあしんかしとね不ゆさぬきふど
ああなぶらきもやらどまづさしよりてよひと
夜いひつづこのおとろを女のみふいひい
れなふわざとるれどおびるどをバゆふや
うなりあうかうしあげづまどあふふやぢて
あふともふいでゆきひらの程のおぼらかぢあ

見れくられて抄
云女の見送るこ
かやうよ名勝を
しげまうこそ女
もえおくらうれ
若のあがりの孩
うこめておぼる
きよハ女もえお
くらべくもまし
とのんまり

ん時めさするハ
心ガハナヤダキ
ガウク心ガウブ
クちどつあをえ

らん事るどもいひいでおまべり出まらん見お
くられてぢごりもをかかりぬべしなこりも
出どころありいとさハやかおおきてひろめき
たちてさぬきのこし強くひきゆひるほしり
へのきぬかりぎぬと神といまくりよろづさ
いれおび強くゆふふし。あけくいでぬる
とてぬ人いとふくし。

心ときめきさる物 廿六段

ささめのがひ。ちごあそをさる所のまへわ
たりさる。よきたきまのたきてひとりふした
つ。からのかぢみのおしくらき見たる。よき

おとよハ別帳よ
格別よるとつあ
まへ。

ひ、まのつるハ
ひるをまほよ
へうよて詩考を
あいつといへる
如くひいるのう
るなるべしと終
尾の詠ん。

男の車とめて物いひあなひせさせし。か
しらあつひけさう志て。香ふ志えつるきぬきさ
つ。あつと小見る人をきあまて心ゆらちなるほ
をか。まつ人などある夜雨のあつ風のふさ
ゆるがさもふとぞねどらか。

さぎあかき物 廿七段

枯るあふひ。ひるをあまひのてうどふとあ
ひえびぞあさどのさいでのおへさ水くさう
しの中ふありけるを見つけたる。又そりから
あひ違ふりし人の文などのふりてつれぐさる
日さがし出たる。こぞのうは不り。月のあか

き夜。

心ゆく物 廿八段

心ゆくハコ、チ
ヨイ存分ナム子
ガハレル。なごい
ふさ。
女画ハ男女の中
を書つづけし絵
を扱の綱なり。

てうむふ。さき食
つて。双六のここ
むん。
はまの。さつハ。
呪咀のねうと陰

よくかいたるをんるあ。詞をかうつづけて
おほかる。物見のかへさみのりこぼれて。その
こどもいとおほくうしよくやる物の車とら
せた。白くきよげなるみちのくがさよ。いとほ
そうかくべくいあらぬ筆志て文かきさる。川
舟の下りさま。さぐるめめよくつきたる。て
うをみふてう多くうちたる。うらがき系の
ねりあハせぐり志る。このよくいあおんや
うし志て河原よ出て。さそのもくし志たる。よ

陽師のまゝるるん

これ又あかりか
れよりりいこれ
よつけかれよつ
けのまゝるるん

檳榔毛の車ハ東
帯などの時兼用
を 車ハ水ハ静
なりガゴよきるん

るねちまきてのむ水。つれぐるるるをりあいとあ
さりむつまじくハあらずうとくもあはぬまら
うどのきて世の中の物語此おろある事のきを
しきもにくきもあやしきもこれふかりかま
ふかり。おほやけしうおぼつかなきのうぞ
きよよき程ふかりたるいと心ゆくこころちす
社寺をどふまうで。物まうさまをふ寺ふハ
法師社にてねむなどやうのむね。思ふ程より
もまぎてしうこころりなく聞よく申たる。びろ
うげハのどやかまやりたる。急ぎたるハかろく
ちく見ゆ。あどろハ走らせし。くの門より渡

馬毛のまいとむ
づうし和名抄又
伊勢氏のまいと
まてん海へきん

りたるをふと見る程もあく過て。供の人をのり
走るを誰をうんと思ふこそをかりけねゆゆ
とひささくゆけバいとわろし。牛ハ額いとち
ひさく。志ろみたるが。腹のしよの志も尾のをそ
白き。馬ハ紫のまだらづきたる。あしげ。いと
トく黒きが足らこのわたりなど。白きあうそ
こうそいの毛ふて。鬚尾などもいと白きけふゆ
ふかこともいひつべき。牛飼ハおほきまてが
みあは志らがふて。顔のあかみてかどかど志げ
なる。げふ志きむおんハをそやのなるよき
そのこも猶もかき程ハさるかこなるぞよきい

まやうくしきハ切
あらしきことあり
と云橋美隆い
り。
ことつ。ことあ
ハよてよハ皆黒
くして年の不ハ
皆白きうのまこと
こ。

たぐこえろ多ハねぶつこのくんと思ふ。こ
とねりハちひやくて髪のうるさきガ。さそさ
つらうふ聲をかうて。かこすりて物をどい
ひたろぞりやうく志ま。猫をうつのかざり
くろくて。おとハ皆志ろく。説経師ハ顔よ
きづとまもらへたるこそ。其とく事のたふとさ
をねぼゆま外目志つればふとわさろくふにく
げろハ。つみやうらんとおぼゆ。この詞ハとど
むべざしと。などのふらうきほどこそ。かや
う此罪ハえが。このことと。かき出けぬ。今ハ罪ハ
少。恐ろ。又たふとき事。さう志んおろり。

蔵人ゆりくろ人
掛云。六位の蔵人
四ヶ年の後巡舞
よあづりて。地
下よゆりくろ人
く。六位も病んハ
殿上もろく。五位
よ成ても。蔵人を
すりてハ。地下よ
あづりくろ人。
さやうのあよハ。
説経のまへに。初
めゆく。

て説経まといふ所よ。いそかいきぬる人こそ。
猶此罪の心ろふハ。さうもあらで。見ゆま。蔵人お
りたる人。昔ハ御せんち。どつハ事もせむ。其耳を
かり。うちわたりハ。おろて。かげも見えざりけ
る。今ハさうもあらざめる。蔵人の五位とて。それ
を。もぞいそが。うつかへど。猫を。ごりつれく
おて。心ひとつハ。いとまある心ちぞすべの。ぬれ
バ。さやうの。あよ。いそぎ。ゆくを。つた。び。二。た。び。聞
そめつれば。つねよ。すう。で。ま。ほ。く。なる。り。て。夏。を
どの。いと。あ。つ。き。う。も。か。さ。び。ら。いと。あ。ざ。や。の。ふ。
う。と。あ。あ。あ。を。あ。び。の。さ。ぬ。き。さ。ど。ふ。み。ち。

なり。

何ぐもてハハ
云々んてうそを

らしてあさあり。急げし物いみつけくもハ。け
ふさるべき日ふれどくどくのかさハハ。さハ
らむと見えむとふや。いそぎきて。其事をも聖と
物語きて。車をつらへぞ見いれ。ごとふつきた
るけしきなる。くくあいざりける人など。のま
うであひくも。めづらしがりて。ちのくみより物
語しうる。づきを。かき事など。かろり出て。扇ひ
ろうひろげ。口ふあて。笑ひ。さうぞく。さく
ず。かいま。さぐり。まま。さぐり。み。こ。な。さ。か。な
こうち見やりなど。忘て。車。や。し。あ。ほ。め。そ。ま
り。何が。し。よ。て。其。人。の。せ。ハ。か。う。経。く。や。り。る。ど

よて。そ。傍。の。れ。こ
を。ま。ま。ハ。海。あ
ら。ひ。ハ。鐘。撞。き。な
ど。つ。ひ。出。て。た。ふ
と。さ。む。ら。く。ふ。る
さ。ま。ん。ハ。海。ハ。法
花。經。の。要。文。を。同
者。の。同。ら。る。を。
海。師。の。一。三。答。つ
海。を。ら。る。ん。

いひくらべみくもほどふ。此説經の事を聞いれ
む。ふかハ。常。ふ。き。く。こ。と。な。れ。を。耳。な。れ。て。め。づ
ら。し。う。た。お。え。ぬ。ふ。こ。そ。い。あ。く。め。さ。と。あ。ら。で。講
師。み。て。ま。ば。あ。る。極。ふ。さ。き。あ。く。お。も。を。る。車。と
ど。あ。て。た。る。人。せ。の。そ。より。も。か。ろ。げ。な。る。な
ほ。し。さ。ぬ。き。ず。い。の。ひ。と。へ。る。ど。き。く。も。も。か
り。ぎ。う。ぬ。あ。よ。て。も。さ。や。う。よ。て。わ。か。く。ほ。そ。や。の
や。る。三。四。人。を。の。り。さ。ぶ。ら。ひ。の。も。然。み。さ。ば。あり
ま。て。い。れ。バ。も。と。み。く。り。つ。る。人。も。あ。し。う。ち。身。志
ろ。ぎ。く。つ。ろ。ぎ。て。か。う。ぎ。の。も。と。近。き。柱。の。中。を
ど。み。と。急。い。れ。バ。さ。ま。か。ふ。ず。お。も。も。な。ど。し

そえぐしうの花
やうふふぎと
きんぎょ
いりてかくりつ
こふ半のどうぞ
世ふたひひ傳ふ
る極よと心とが
めて説法とるん

てふーをがみみくるを講師もそえぐしう思ふ
なるべーいかでかくりつこふをのりと説出さ
る。聴聞もるとたちとさぎぬかづくほどふとる
くてよき程ふてまいつとて車どもものうこなど
見れこせてくれどちつふ事も何事ならんと覺
ゆ見志りたる人をバをかーと思ひ見志るぬハ
誰あらんそれふやかれよやとめを付て思ひや
らるこそをかーと説。説經志つハかう志け
りなど人いひ傳ふるふ其人も有つやいづい
など定まりていそれくるあまりありなむかハ
むげよさーのぞかでハあそんあやしき女ごふ

むげハ一向ふさ
らくふをどつふ
ささ
つがさうぞくハ
つがさうふさ
そさむよそむひ
まう。

抄云。わざいとい
ふより。又こつと物
がさう。

いみづく聞めるものをバざればとてそどめつ
かさハ。かちありきささる人いなかりき。たまさか
ふハ。つばさうぞくちむむかり志てふまめきけ
さう志てこそありか。それも物やうでをぞせ
し。説經をどハ殊ふ多くもきかざりき。此頃其を
りさー出たる人のいめち長くて見まハ。かバ。い
あちのりそ志り誹謗せまハ。ぼだいといつふ寺ふ
けちえんハわうせーがきふまうでさるふ人の
ことより。とくかへり給へいとさうぐーとい
ひたれば。もちすのそまびらふ。
こととあてもわく。ささるまけ霞をおきてうき

初集又子載集よ
入たり上求善授
の心をよめり。
そうちう一本よ
つねうらう家と
ありたよ未詳。

小一条院北家此
巻の十丁ノオニ
ミエタルヲ錯乱
ナレバゴ、ニ出
セリ。

せふ又ハかへる物あハとかきてやりつ誠ふい
とたふとくありれやれやがてとまりぬべく
ぞ覚ゆるさうちうが家の人の中ぞかきさも忘
ぬべし。

小一条院 廿九段

小一条院を今内裏とぞつふおとくまを殿ハ
清涼殿ふて其北なる殿ふれちしる西東ハわ
さどのふて渡らせ給ふ常ふさうのぶせ給ふ
おまへいつ不なれば茶載やどう急急ゆひてい
とそその二月十日の日のうらくと長閑は照渡
るふわたどの西のひさふてうへの御筆吹せ

うへハ一条院の
御手
言砂ハ催まの
うさひ物

芥つちの人の人
も赤如く心よ抱
のかたをさうけ
ん。越古音よより
て心よ抱の慈ま
しとのさこ

あつこよハ義舞
のさ成べ

終ふたのとはの文氣御筆の師よて物給ふを
こと笛ふらうして言砂ををりかつふうせた
まへバなやいみどりめでうとつふもよのつ
ねまり御筆の師よてその事どもまどまうし終
ふいとめでたしむものもとふあつまりいで
見とてまらるをりさどハ我身ふせりつみしな
どあやゆる事こそなるまじけさハ木エのぞ
うりて。能くまよりふく。いみどりあらく志
うあまバ殿上人女房のあうらんとぞつけたる
をうらふつくりてさうやうのまをいりうどの
種ふぞ有るとううハ尾張のかねときが娘

そひさぎひて
ハ帝ふ言達のそ
ひまわらせてま
り。

わさうせれそ
すいてハ帝の中
宮の侍方ふり
らせのふあり。

か一条大納言ハ
よか一条左大臣
とらうと同一人
師患とまり。

此そくたりたり。これを吹笛ふあつせ給ふを。そ
ひさぶらひて。まほ言う吹せおそくさせえき
さぶらハトと申せむ。いおどかさりともしき
りやんとて。みそかよのみ吹せたまふを。あま
よりわたらせれそ。すいて。このちねなうりけ
り。只今こそ吹め。とおほせらまて。吹せたまふ
みどらうを。し。

小白川 三十段

小白川といふ所。か一条の大將殿の侍家ぞか
し。それうて上達部けちえんのハ講志給ふよ。い
みどくめでしき。うりて。世の中の人の聚りゆき

おきでので。も
よ。ゆくよ。といふ
初を。含めて。見
づ。ハ格あ。ま
あり。と。英。隆。い
り。

その限もあ
む。ハ初。ハ八。講。の

てきく。遅からん車ハ。よるべきやうもな。とい
へど。露とらふ急ぎなきて。げみぞ隙を。うりける。
ながえのう。いふ。又。う。か。さ。ね。て。つ。ど。か。り。ま
で。ハ。あ。く。物。を。聞。ゆ。べ。ハ。六。月。十。日。よ。日。よ。て。異。き。事
世。ハ。知。ら。ぬ。程。あり。池。の。蓮。を。見。や。る。の。み。ど。さ。い
涼。き。心。ち。も。る。花。右。の。ね。く。た。ち。を。お。き。奉
り。て。ハ。あ。ま。せ。ぬ。上。達。部。な。く。ふ。こ。あ。あ。め。の。な。ほ。い
さ。い。ぬ。き。浅。黄。の。か。さ。び。ら。を。ぞ。も。か。い。給。へ。う。あ。い
れ。と。な。び。給。へ。う。い。あ。を。あ。び。の。う。ぬ。き。白。き。い
か。ま。も。涼。げ。な。り。安。親。の。宰相。な。ど。も。答。や。ぎ。だ
ち。て。す。べ。て。あ。ら。と。き。事。の。限。も。あ。ら。ず。を。か。い。き

たふときのみならず
むとたり。
三位中将美隆云こ
こハ三位中将考の
考物云くとつづく
久ること其ついで
ふぞ三位申物とい
ふハ園白殿の事と
と釋すも園をそと
みて書る文法いと
面白く今の人々
ハ今の園白殿を討
ハ三位申物と云こ
えくまうさるごと
べくかく簡は面白
くハ始かくぬるこ
もべては比の事
よハかくるや
ろき相つうひある
をよ味あづく
△の事知ふツレ
がとつ細を入れて

物見たり。ひさしのみも高く巻揚て長押のうつ
ふし達部奥ふ向ひく長くとみ終へり。其下ふハ
殿上人着き公違かりさうぞく。なほさるどもい
とをかかくておも定らむこくかこふたさ
まよひ遊びさるもいとをか。実字の兵衛の依
あかあきさらの侍従など家のこふて今少い
いりたり。まぶわらさるる公違などいとをか
うてたももお目たけたる程ハ三位申物とい
園白殿をぞきこえし番のうも女終ふこあめの
なほさるどもいぬきこきもつかの御袴ふさ
りたる白きひとへのいとあざやかふるをき終

きくづく。

懸盤のみ安んぬ言
よこす。

ひてあゆみ入終へるさびかりかろび涼げふ
る中ふあつうとまげさるべきほどいみじうめ
てたしとぞ見え終ふおそぬり不ねなど不ねハ
かそれど唯赤き紙を園トさるふらつつかひと
ち終へるハちでしうのいみじう嘆さるふぞい
とよくふしるまぶ講師ものぼくぬ程ハ懸盤ど
も志て何ふかいあらん物まふるづくよちか
の中納言の御ありさま常よりせまさりて清げ
ふねをもさるまぞ限さるや。上達部の御名など
かくべきまあぬをたれさるんと少く程
ふればいろあひとなくといづく。旬ひあづく

常より平生といふまをれど、こゝハ、始終と俗まいふよひと、かろやうよ用ひとも例も多し、おぼれくべし。

事ハ、一かよふことかゝとあり、はたよろしうしん。

かふ、いづれともちき中のかさびらをも、是ハ減み
只ちほひひとつをきさるやうふて、常み車の方
を見おとせつゝ、物やどいひおとせ給ふをか
と見ぬ人まうりけんを、後おきこる車れひまを
おのりも、池お引寄せたてたるを見給ひ
て、實字の君ふ人のせうそこつきぐくく、いひつ
べあらんも、おひとりとめせぶ、いのおあう人ふか
あらん、えりておてれり、くもふ、いかがいひや
るべきと、近くお給へるど、かりいひ合せて、やり
給らん事、いきこえど、いみどく、ようい、まて、車れ
おとに、あゆもよるを、且ハ笑ひ給ふ、跡のまふよ

けさうのく、ハ、
そまよあづり
ぬ、おさよのん、
をつあまり、一
おけんさうのん、
ことあり、敬濟さ
るべし。

とひぬんども、一
かよとひぬんと

りていふあり、久しくたてれば、歌るどよむ、や
あゝん、兵衛佐返、思ひまうけよるど、笑ひて、い
つゝのか、つりごと、まかん、と、おとち、く、遠路まで、
皆そを、さ、は、お見やり給へり、ぞおけさうのん、
く、お見やり、も、その、う、有、を、か、へり、ごと
き、たる、ふ、や、お、あ、ゆ、くる、程、お、痛、を、さ、出
て、よ、ひ、返、せば、歌、る、どの、お、ど、を、い、ひ、あ、や、ま、ち、て
ご、の、り、こ、そ、よ、び、う、さ、め、く、かり、つ、る、程、お、あ
る、べき、事、う、ハ、直、ま、び、き、お、も、あ、ら、ど、物、を、と、ど、れ
ぞ、ち、ち、ち、追、く、ま、お、り、つ、く、も、心、お、と、な、く、い、の、に
いかおと、た、ま、お、と、ひ、給、へ、ど、お、い、そ、お、ど、権、中、納、云

もとありつづき
うよからん。

人よりおけよハ
人よりおささり
て。

なほき木をまん
ハなわくし
を志ひて曲折を
つけて。驚ぐらた
るを。

見給へば。そこおよりてけしきむみ申も。三位中
おとくいへ。あまり有心過て志そこまふる。との
給ふ。是も唯同し事おなん侍るとつふ。いきこ
ゆ。藤太納言。人よりおけよのぞきて。いかゞい
ひつるとの給ふ。めれが。三位中将いとをほき本
をなん。柄しをりたぬ。ときこえ給ふ。うち笑
ひ給へ。皆何となく。こと笑ふ。声聞え。やをらん。
中納言。さてよび。つされつる。ささふ。い。かゞ
いひつる。是や。なる。た。事。と。ひ給へ。と。ひさ
し。う。さ。て。侍。り。つ。れ。ども。とも。かく。と。侍。る。ざ。り
つ。ま。ば。さ。い。ま。お。り。を。ん。と。て。か。へ。り。侍。る。を。よ。び

此車ハ。扱云がの
女車。笑ふ。考をき
き。ん。虫。ん。や
う。に。お。げ。い。あ
り。

か。と。不。ハ。ま。わ。り
舞。う。て。い。へ。り。調
子。で。ロ。ク。ニ。ナ。イ
る。

てとぞ申さ。これの車をらん。見しり。りや。な。ど
の給ふ程。講師の。りぬ。ま。皆。お。志。づ。ま。り。て
そ。な。の。み。見。る。程。此。車。ハ。か。い。け。つ。や。う。ふ。う
せ。ぬ。さ。し。も。だ。れ。る。と。只。け。ふ。と。め。たり。と。見。え
て。こ。き。い。と。つ。ぎ。さ。ぬ。ふ。あ。と。あ。み。の。お。り。と。の。
ま。つ。り。の。う。も。もの。う。と。ぎ。な。ど。ま。て。志。り。お。ま
り。さ。る。も。や。ぐ。て。ひろ。げ。な。う。う。ち。か。け。る。と。志
たる。ハ。る。お。ん。な。く。ん。ふ。う。ハ。人。の。か。と。不。る。
ん。事。より。い。げ。ふ。と。聞。えて。中。と。い。と。う。と。ぞ
覚。ゆる。朝。座。の。講。師。清。範。う。う。さ。の。う。へ。も。ひ。かり
と。ら。た。る。心。ち。さ。く。い。と。く。ぞ。あ。る。如。暑。さ。の。わ

まへなる車ども
おほほめの出る
んとて我通り出
べきたの車お業
肉いふなり。

や、ハよびかけ
てつみ調ふ俗よ
や、とつよ同

ド漸とつみ後ハ
ミウ。

びーきふそくしてさうさまき事のくふ過す
まどきをうらなきて。唯少一きいてかつりな
んと志つるを志きさみふつどひつる車れおく
みさんめくれをいづべきかこもなう。あーこの
かう果をまびうで出たんとて。前なる車ども
みせうそことそれバ。迎くたけんらけいさいや。ハ
やくと引いであけく出をを見送ふいとが
がまーきまぞんごといふおあいのんごらめさ
へ笑ひよくむをまきくといれむいらへませでせ
まがり出れば。權中納言や。まらりぬるをさ
とて。うら笑ひ臨へるぞめでさきさきも耳うも

後拾遺本院侍
従の奇よ急よか
ける。まらり人を
えうぐれ。おま
トとこちをつね
よとふべ。

寛和二年六月花
山院は出京の阿

とあらざあつきよまよひいで。人して五ふん
れ中よいらせ給いねやうもあらどときこえ
かけてかつりいでよきそのまらめよりやがて
とつる目すでたてる車のありけるが。人きりく
とも見えすも。てたがあさあう。除るどのや
うみてすごしくねが。ありがくめでこころ
ろよら。いかさう人あらん。いうで志らんと問
ひけうを聞たすひく藤大納言。たまかめでこの
らん。いとよく。ゆき物よこそあるま。との
たまひつるこそをか。けき。さて其二十回あま
りふ。中納言の法師よるり臨ひよ。こそあそれ

西行の御中納言
義懐の法師より
り給ひし時の事
なり。

ありき。梅などのちりぬるもなほうのつねを
りや。老きまのつものどだよいふづくもあはぬ御
ありさまよとてみえ給ひか。

七月ばかり 三十一段

つや、うハ、キレ
イニ、ウツクシキ
素より。

七月ごありいみどくあつれづよろづの雨あ
けるづ。夜もあつとふ月のころいねおきて見
いどすもいとさう。やみもよさう。有明はつら
ふもねろりなり。いとつや、かなるいたのそ
ちかう。あぢやかあるたみひとひら。わりそめ
ようらまきて。いんのかちやう奥の宮ふたしや
りたるぞあぢきなきん。ふこそたつづけし。

うらちやのつら
んハ、又あはら
うんよこ
装束のさまよ
あひをどのもハ
多由義後のま
板の附縁ハ装束
扱をよとればそ
れを見て、そふべ
し。

たつたりハ、た
そまれてあは
り。礼記ハ佩
ある委の字をよ
り。

けうしちめさあらんよんをいでよけらるづ
し。うき色のうらいとこくてうハすこしあ
りたるさらず。とき綾のつや、かなるがいた
くハをえぬを。がしちめてひききてぞねあ
る。かうぞめのひと。紅のこまやのなすす
のそのものこし。いと長くきぬの志さよりひ
れ。さもまどとけを。うきなめり。そバのかとみ
かみのうちた、なまりて。ゆらくかなる不ど。長
さおし。そのまじ。つらふ。又いづこよりみよあ
ん。おろけのい。うきりみちたる。二あお
のうしぬき。あるかなき。うのかうぞめの狩衣。白

きよのち草の。麻のきよのち草。雲一あらば。明一てゆくん。祝ハ一。つと。新粉。一。んえ。つと。みより。つと。は。き。く。万葉集。一。んえ。つと。つと。下。句。明。して。い。ゆ。け。母。と。あ。つ。と。と。あ。

きよとて。おのいとつや、かまうらちきぬの。霧
ふいづく。志めり。つと。をぬぎたれて。びんの。きこ
し。ふく。ご。み。た。ま。ぼ。の。お。い。き。ら。れ。つ
け。き。こ。志。ど。げ。な。く。み。ゆ。お。つ。ほ。の。つ。ゆ。た。ち。ぬ
さ。き。よ。ふ。か。ん。と。て。道。の。や。ど。も。心。も。と。ま。く。を
ふ。の。下。草。も。ど。い。ど。さ。び。て。我。う。へ。ゆ。く。ふ。か。う
し。れ。あ。が。り。た。れ。ば。み。ま。の。そ。ば。を。い。さ。か。あ。け
て。み。る。よ。た。き。て。い。ぬ。ん。人。を。か。く。露。を。あ。は
ま。と。お。や。ふ。よ。志。を。く。ん。れ。ば。ま。つ。ら。つ。ご。の
言。ふ。ほ。く。紫。の。紙。も。り。つ。と。お。ひ。ろ。ご。う。を。ご。ら
あり。み。ち。め。く。ふ。紙。の。た。く。う。が。み。の。ほ。そ。や。の。な

こよなき。他。む
り。へ。つ。つ。あ。つ。つ
の。あ。つ。つ。れ。す。り
せ。これ。の。こ。よ。な
く。つ。つ。れ。り。し。い
ふ。や。う。あ。つ。つ。用
ふ。つ。つ。つ。て。俗。ふ
カ。ク。バ。ツ。と。つ。ふ
き。なり。

つが。花。あ。え。れ。る。あ。あ。す。こ。よ。ほ。ひ。う。つ。り。た。る
も。心。懐。の。も。と。ふ。ち。り。ぼ。ひ。た。る。人。の。け。を。ひ。あ
れ。ば。き。ぬ。の。中。より。み。つ。み。う。ち。急。み。く。な。げ。し。ふ
お。し。か。り。あ。つ。ま。ば。い。ぢ。る。ど。も。う。人。よ。い。あ。ら
ね。ど。お。と。く。べ。き。ん。を。へ。も。あ。ら。ぬ。ふ。ね。た。る。も
み。え。ぬ。う。か。ま。と。思。ふ。こ。よ。な。き。さ。び。り。の。清。新。い
か。な。と。て。す。の。う。ら。ち。ふ。な。あ。ら。だ。かり。入。れ。れ。ば。つ
ゆ。り。り。さ。き。なる。人。の。も。ど。が。さ。ふ。と。い。ら。ふ。を
か。き。事。と。り。た。て。か。く。べ。き。ふ。あ。ら。ぬ。ど。か。く
い。ひ。の。は。せ。り。き。ど。も。に。く。から。ず。枕。が。み。なる
箱。を。我。も。ち。つ。つ。あ。つ。く。お。つ。び。て。か。き。よ。さ。つ。が。あ

今が引引く
抄云女のひき
うて用をせら
うさるゑお打と
どくべきんをふ
もあゝぬと男を
いひ首を

かうのうハ香を
字書してかハよ
不ひをり

すり近うよりくるふやと心時めきせらまていま
まらひきいららとりてみるどしてらうくた
おしころ事などうちのさめ恨みさどすうにあ
うたまりて人の聲ういほさういでぬべし霧の
こえまらんえぬほどうといそぎつるふもさゆみぬ
つこそうしうめさ多れ出ぬる人もいつの程よう
みえて花の病をうらあろよつてあまきとえさし
出だかうのかのいみどう志めさうよほひいとを
しあまうけしとたき程またれはたち出て我
きつろふもかくやと思ひやらうもをうかりぬべし

標註枕草紙讀本卷一終

